



SHEAFFER®

The Signature Pen
SINCE 1917

書くこと、それは音楽に似ている。

川のようにゆるやかに、
流れるままに。
思いを
文字にのせて
誰かにそっと届けている。

スタイルをもつペン—The Signature Pen, Sheaffer

当日会場にてシェーファー商品の展示をしております。

—シェーファーは東京ニューシティ管弦楽団を応援しています。—

BIC ジャパン株式会社 〒104-0042 東京都中央区入船 2-3-7 TEL 03-5542-2444 www.sheaffer.jp

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団

第62回定期演奏会

2009年5月28日(木) 19時00分開演

東京芸術劇場大ホール
Tokyo Metropolitan Art Space Large Hall

主催:東京ニューシティ管弦楽団

Program

“ピリオド奏法による交響作品へのアプローチ”

「ブラームスシリーズ—①」

指揮:内藤 彰 Conductor: NAITO Akira

コンサートマスター:浜野 考史 Concertmaster: HAMANO Takashi

●指揮者によるプレトーク 18:55~

ブラームス Johannes Brahms (1833~1897)

交響曲第2番ニ長調

Symphonie Nr. 2, D-dur op.73

- I. Allegro non troppo
- II. Adagio non troppo
- III. Allegretto grazioso (Quasi andantino)
- IV. Allegro con sprito

休憩15分—intermission [15']

交響曲第1番ハ短調

Symphonie Nr. 1, c-moll, op.68

- I. Un poco sostenuto-Allegro
- II. Andante sostenuto
- III. Un poco allegretto e grazioso
- IV. Adagio-Più andante-Allegro non troppo ma con brio

ヘンレ版(新版)使用

お願い 演奏中は、携帯電話・アラーム付時計等は演奏の妨げにならないようご配慮ください。他のお客様のご迷惑になる様なご行為は慎しんで頂きますようお願い申し上げます。

ブラームスが活躍した
19世紀後半の演奏法について

東京ニューシティ管弦楽団・音楽監督 常任指揮者

内藤 彰 | NAITO Akira

私たち東京ニューシティ管弦楽団はここ数年、モダン楽器(現在使用されている楽器)を使いつつ、その演奏法を作曲された当時に近づけることによって(ピリオド奏法の採用)作曲家がイメージしていたであろう本来の響きを極力再現できるよう努力してきました。

今回演奏するブラームスが活躍していた19世紀後半は、まだ現在耳にするようなヴィブラート奏法が市民権を得ておらず、特にオーケストラ演奏ではヴィブラートはほとんど使われないのが通常でした。但し独奏の場合に限っては、現在とはやや趣が異なる振幅の狭いさやかなヴィブラートが時折効果的に使われたりもしていたようですが、それらも現在私たちが耳にしているような良くも悪くも派手で華麗な、しかも常にかけて続けられているといった種類のものでは決してありませんでした(そういったヴィブラートはその頃まだ公式には世の中に存在していませんでした!?)。

当時ブラームスには、彼の作曲に大きく影響を及ぼしたヨーゼフ・ヨアヒム(19世紀随一といわれる名ヴァイオリニスト)という友人であり、良き協力者がいました。彼はブラームスのみならず、シューマンやブルッフ等多くの作曲家から協奏曲他の初演(または献呈)を依頼(提供)されるなど、単に大本流ヴァイオリニストというだけではなく、当時のクラシック音楽界に多大な影響を与える大音楽家でした。

そのヨアヒムは、晩年(20世紀初頭)自らの教則本の中でヴィブラートに対して「上品かつ健全で感受性豊かなヴァイオリニストは、揺れのない(ヴィブラートのない)音調を正規なものと常に感じているものである。そしてヴィブラートは(現在とは違い)振幅のわずかなものしか念頭に置いていませんが)内的必然性の高まりにより(特に)表情豊かに表現したいと思う箇所ではしか通常は使用しないものである」と述べています。彼の晩年のレコードを聴きますと(バッハ、ブラームス等の小品の独奏)、記述どおりの19世紀後半のヴァイオリン奏法本流(ほぼノンヴィブラート奏法)の響きが見事に伝わってきます。現代ならばこれらの作品は当然のようにヴィブラートたっぷりに演奏されるところでしょう。しかし当時の音楽界は、まだ前述の如くヨアヒムのような流れが主流であり、言い換えれば、これらの事実は今も頻りに演奏されているロマン派の有名なヴァイオリン協奏曲なども、その多くは、ソリストですら現在のようなヴィブラートはほとんど使わずにはほぼノンヴィブラートで演奏していた証となるともいえるのです。

何故ならこれらの名曲の多くはヨアヒムの演奏法の影響下で作曲され、世の中に紹介されていっており、それ以前に作曲されていたあの有名なメンデルスゾーンの協奏曲ですら、ヨアヒムが若い頃メンデルスゾーンに弟子入りし、徹底的に指導を受けたその結果が彼の「ほぼノンヴィブラート奏法」につながっていったのですから。

しかしながらブラームスが交響曲を発表しているちょうどその頃、一方ではヴィエニャフスキーやイザイ等の大ヴァイオリニストが、こういった大本流＝王道をいく人たちからは下品と揶揄されながらも、現代のヴィブラートのはしりとも言える幅の広いヴィブラートを使い始めていました。この流れを受け、後年(1910年頃以降)フリッツ・クライスラーが現在のヴィブラートに直接つながる近代ヴィブラートを確立することになります。彼の、「幅広く、常に掛け続けるヴィブラート」は以降急速に世界中に普及し、現在のヴァイオリン奏法の本流となっていったのです。私に言わせればどんな場合でも常に同じ過剰な揺れで化粧してしまう「十把ひとからげ奏法の」の大蔓延の始まりです。

【拙著「クラシック音楽 未来のための演奏論」(毎日新聞社刊) 参照】

そして今その奏法の欠点に対する見直しが世界規模で始まろうとしています。

遅まきながらその推進者の一人に加わった私は、決してヴィブラート奏法そのものを拒絶する者ではありません。その華麗で豊かな響きを演奏に生かしたい気持ちは十分に持ち合わせています。しかし、現在の奏者が「初めからヴィブラートありき」になってしまったがため、本来の、右手で豊かな音楽表現をすべき弓使い(ボーイング)があまりにもおろそかになってしまい(現在のヴァイオリン教育ではノンヴィブラート時代ほどには重要視されなくなった!)、世界の一流オーケストラまでもが常に平坦でぶっきらぼうな右手の棒弾きに終始してしまっている現状を、私は大いに憂えているのです。その最大の原因は、過剰なまでのヴィブラート効果によって、本来あるべき「ヴィブラートとは別種の重要な音楽表現」が相対的に軽んじられるようになってしまったことにあります。私はそれを気づいた者の義務として、音楽のもつ素晴らしさを最大限に生かすべく、適正にヴィブラートを制御し、その弊害を減らすことによって、本来の豊かな音楽表現を取り戻そうとしているだけなのです。

今宵はこうした点を最重要テーマとし、決して作曲された当時の演奏習慣の物真似をすることが目的ではなく、当時のノンヴィブラート奏法を基本としつつも、ブラームス以降発達して来たヴィブラートの良さも奏法の一部には取り入れつつ、ブラームス時代よりさらに発展向上した演奏を目指したいと考えています。

ヴィブラートをほとんど使わない分、いままでよく耳にしてきた厚みや華麗さをお好みの方には、その表現が物足りなく感じられるかもしれません。しかしそうした戸惑いとは別に、19世紀を生きたブラームスが本来求めていたであろう「音楽」を、今まで聴いたことのない「新鮮な響き」として、新たに受け入れていただけるものと私は信じて止みません。

参考：雑誌「ストリング」(中野雄連載「ビリオド奏法とオーケストラ～指揮者・内藤彰の信念と挑戦」)

PROGRAM NOTES

相場 ひろ(フランス文学者)

2

ブラームス／交響曲第2番ニ長調

ヨハネス・ブラームスの四つの交響曲は、作曲時期から2曲ずつの2グループ Symphonie Nr. 2, D-dur op.73 に分けられると考えてよい。最初の2曲である第1番と第2番はそれぞれ1876年と1877年に書かれた。第2番ニ長調作品73は、先に完成・初演され高い評価を受けた第1番の後を受けて、翌年直ちに着手され、その大半は77年夏に滞在していたオーストリアのペルチャツハで書かれている。ペルチャツハはヴェルター湖畔にある小さな村で、すばらしい景観と地中海的な穏やかな気候で知られる避暑地である。長い年月をかけて構想を練り上げられた第1番とは対照的に、わずか半年ほどの期間で一気に書き上げられた第2番は、このペルチャツハの空気を反映した暖かみと明るさにあふれ、ブラームスの率直な心情が透ちると評されることが多い。しかし、実際には第1番ほど緊密ではないにせよ、全曲は綿密なプランの上に構築されている。

作品の初演は1877年12月30日、当時の名指揮者ハンス・リヒターの指揮するウィーン・フィルによって行われ、第1番の初演にもまさるたいへんな好評を得、直ちに各地で再演の機会を得た。

第1楽章:アレグロ・ノン・トロツポ

ソナタ形式を採用し、「長大な主題提示部～やや短い展開部～再現部」というソナタ形式の構成を持つ。曲はまず、チェロとコントラバスが「ニ～嬰ハ～ニ」の三つの音からなる動機を提示して始まる。この3音は交響曲全体にわたっていくつもの主題や旋律のベースを成して重要である。続いてホルンと木管が奏する第1主題は、伸び伸びとした田園的な雰囲気なたたえ、ヴィオラとチェロにあらわれる第2主題は短調で、ワルツめいたリズムを持つもののほの暗い雰囲気を醸す。

第2楽章:アダージョ・ノン・トロツポ

かなり自由なソナタ形式により、瞑想的な深みを持つ。冒頭、チェロで荘重に歌われるどこか悲しげな

指揮・内藤 彰

Conductor

NAITO AKIRA



名古屋大学理学部在学中より指揮を山田一雄氏に師事する。桐朋学園大学研究科(指揮専攻)にて、小澤征爾氏、秋山和慶氏、尾高忠明氏他に師事し、修了後(社)山形交響楽団の専属指揮者を務めた後、日本の多くの主要オーケストラを指揮してきた。

海外では、1991年ベオグラードフィル、1992年にはモスクワ音楽院大ホールにて、モスクワ交響楽団を指揮。その後1996年5月、ロシアの国立ヴァローニッシュ歌劇場にて『セヴィリアの理髪師』を、1997年5月には、ベラルーシ国立歌劇場にて『蝶々夫人』、また2001年3月にはサンクトペテルブルグ・カペラ交響楽団、2002年5月ロシア国立ウリヤノフスク・アカデミー交響楽団に客演している。その他にも2001年12月の北ハンガリー交響楽団、2002年7月ミラノスカラ座フィルのメンバーを中心とする州立ロンバルディア室内管弦楽団の北イタリアツアー、2003年3月にはメキシコ州立交響楽団を指揮している。

2004年1月に行なわれた歌劇『蝶々夫人』公演(東京ニューシティ管弦楽団第34回定期演奏会)にて、日本の伝統的'かね類'(寺の釣鐘の音、お椀型のキン、風鈴他)に、12音の音程を持たせ'楽器'として特注創作、それにより作曲者の願う本当の『蝶々夫人』の世界初演に成功し、音楽界の話題をさらうことになった。更に2004年7月には、イタリアのブッチーニ・フェスティバルにおいて、この鐘が使用され、地元の新聞・テレビに大きく取り上げられている。

2004年以来ブルックナーの交響曲第8番のAdagio楽章をはじめ、交響曲第5番、第9番など新稿の世界初演を果たした。この「ブルックナー新稿の世界初演シリーズ」の話題は、多くの新聞、音楽雑誌を賑わすのみならず、ライブ録音のCDは、「レコード芸術」誌などで高く評価されている。また、日本初のブライトコップ新版によるベートーヴェン交響曲チクルスも大いに注目を集めている。

2009年1月に初めての著書「クラシック音楽 未来のための演奏論〜くつがえるオーケストラ演奏の常識!〜」を毎日新聞社より出版し、斯界に大きな反響を呼びおこし話題をよんだことは記憶に新しい。

現在、東京ニューシティ管弦楽団、及びプロ混声合唱団「東京合唱協会」音楽監督・常任指揮者、日本指揮者協会幹事。

東京ニューシティ管弦楽団

Members

代表理事

内藤 彰

理事長

三善 清達

常任理事

作田 忠司

音楽監督・常任指揮者

内藤 彰

首席客演指揮者

曾我 大介

客演指揮者

アンドレイ・アニハーフ

コンサートミストレス

鈴木 順子

客員コンサートマスター

浜野 考史*

■事務局

事務局長

高松 正典

営業企画

古屋 修 桜井 聖子

主催事業

山本 ふさこ

チケットデスク

武曾 眞紀子 木村 有美子

総務・経理

相吉澤 絵里 松本 敬子

演奏事業

森本 美紗慧 石本 順子

■マーケティング・アドヴァイザー

石井 友二 本田 瑞穂

■イメージコーディネーター

古山 忠男 嵯峨 亮子

第1ヴァイオリン

伊東 佑樹*

上田 博司

大竹 奏*

小澤 郁子*

剣持 由紀子*

小島 光敬*

笹井 飛鳥*

徳井 えま*

中川 さと子

中澤 真理子*

中村 朱見*

山川 奈緒子

出口 順子*

寺田 久美子*

羽島 健*

福田 理貴*

渡辺 田鶴野*

第2ヴァイオリン

○富山 ゆりえ*

荒巻 泉*

岡田 邦子*

栗原 りか*

高階 久美子*

山江 洋子*

老田 美郁*

小幡 紗生*

川城 千秋*

小林 清美*

深澤 聡子*

松岡 聡子*

ヴィオラ

○桜井 多美子*

浅川 文

宇佐美 久恵

久郷 寿実子*

竹鼻 江美子*

堀江 冬子*

高瀬 有美*

高橋 淑子*

徳高 真奈美*

古田 敦子*

チェロ

○齋藤 章一*

大島 純*

葛西 英一

富成 倫子*

船田 裕子*

星野 敦*

望月 直哉*

榊原 糸野*

高橋 敬*

コントラバス

○徳高 宏行*

青山 幸成*

大黒屋 宏昌*

小澤 剛*

鈴木 智*

本多 学*

フルート

○井ノ上 洋*

丸田 悠太

富田 朗子*

オーボエ

○徳田 振作*

池田 祐子

斎藤 由紀*

クラリネット

○西尾 郁子*

松元 香*

ファゴット

○霧生 吉秀*

○藤田 旬*

松里 俊明*

ホルン

○小川 正毅*

○広川 実*

飯島 さゆり*

猪俣 和也*

松浦 光男*

曾根 敦子*

トランペット

○中西 清一*

○山本 英司*

後藤 慎介*

依田 泰幸*

トロンボーン

○西岡 基*

恵藤 康充*

南城 友恵

府川 雪野*

テューバ

○牛尾 正明*

松下 晃一

ティンパニ&打楽器

○石澤 学*

藤城 佳之

大河原 渉

辻本 洋一

ハーブ

平島 さより

平山 菜津子

○印は本日の首席奏者

*印は本日の出演者

パーソネルマネージャー

山川 奈緒子

ステージマネージャー

青木 勝弘

ライブラリアン

長田 康宏